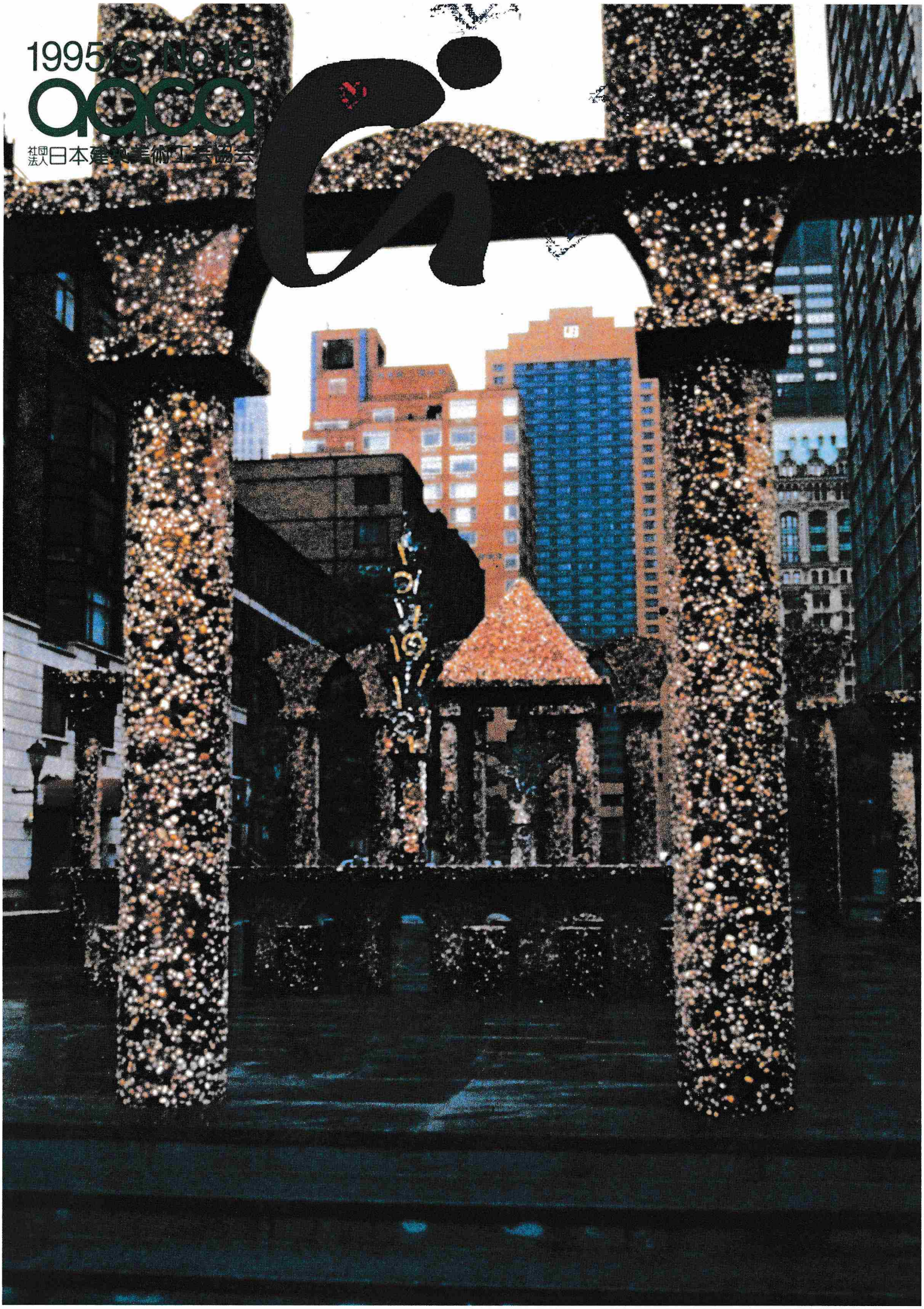
1995/6 No.18

aaca

社団法人日本建築装飾工芸協会



CONTENTS

第4回aaca賞審査経過並びに審査講評
…… 1
aaca特別講演会「公共芸術と環境」
ジョーン・モニデール アメリカ駐日大使夫人
…… 5
aaca特別講演会に参加して…… 7
時代の華一輪
田中正秋……11
木村幸夫……12
アピアランス(会員作品紹介)……13
AACAトーク
伊藤萌木……14
TOPICS……15

■表紙写真：ニューヨーク「バッテリーパークシティ」のパブリックアート

第4回AACA賞発表/選考経過

審査委員長　内井昭蔵
AACA副会長・京都大学教授

審査委員　會田雄亮
AACA理事・陶芸家

池田武邦
AACA会員・建築家・池田研究室

榮久庵憲司
AACA理事・
インダストリアルデザイナー

近江　栄
AACA理事・日本大学教授

仙田　満
AACA会員・東京工業大学教授

審査経過：内井昭蔵

平成6年度第4回AACA賞は9月30日に応募受付を締め切りましたが、合計33点の応募作品が集まりました。10月12日第一次審査会を開催、提出資料をもとに第一次審査を行い応募案を検討の結果、

No. 1　門真市南部市民センター
森林浴体験室「森遊回廊」

No. 4　松下電器産業株式会社
情報システムセンター
アトリウム/ランドスケープ

No. 6　八尾市平和モニュメント
「光の道しるべ」

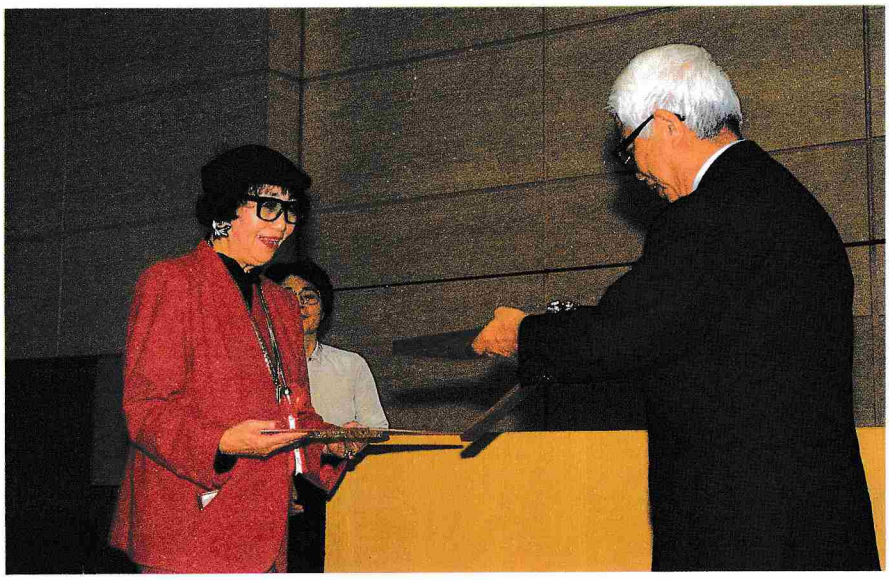
No. 9　岡山県立大学メインプラザ及び
噴水モニュメント
「水の神殿」1994

No.16　生活工房・サッポロファクトリー

No.27　「空からの声」

の計6点が第一次審査で選定された。
更にこの6作品につき厳正に審査、討論を重ね、
AACA賞候補にNO.1　門真市南部市民センター　森林浴体験室
「森遊回廊」を第一候補とし、NO.4　松下電器産業株式会社情報システムセンター　アトリウム　ランドスケープも併せて候補として現地審査とすることに決定しました。
更に特別賞候補にNO.16　生活工房・サッポロファクトリーを推すことに決め現地審査に付することにしました。
11月20日、審査員はそれぞれ札幌、大阪に分かれ現地審査を行い11月23日その結果を持寄り審査会を開催し、再び討論を重ね、今回のAACA賞に土屋壽満氏の門真市南部市民センター、森林浴体験室「森遊回廊」を推薦し、特別賞にサッポロファクトリーデザインチーム、生活工房・サッポロファクトリーに決定いたしました。

左より・内井昭蔵審査委員長/
・来賓の福島忠彦文化庁文化部長/
・特別賞の生活工房・サッポロファクトリーデザインチーム/横沢国夫大成建設設計本部副本部長/
・大賞の土屋壽満氏
・芦原義信会長
・榮久庵憲司審査委員
・仙田満審査委員



AACA賞審査講評：會田雄亮
『門真市南部市民センター 森林浴体験室「森遊回廊」』

正直云って、これほど審査員を迷わせた作品も協会賞が始まってから初めてであろう。第一次審査では、応募された作品の写真を前にして我々一同、これは一体何だろうと云うのが率直な感想であった

森林浴体験室「森遊回廊」と云うタイトルは魅力ある言葉であり、又、写真で見る限り緑あふれる林の景観は、大変好ましいものであった。併し我々は、あまりにも建築であれ彫刻であれ、形を供なった「もの」に対して判断をする事に馴れすぎてしまっていたのかもしれない。ともあれ、実物を拝見しなければと大阪に飛び、門真市南部市民センターに出掛けて行った。

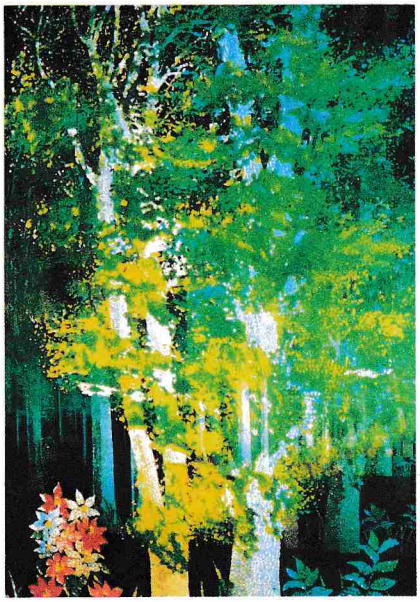
森林浴体験室と書かれたドアーを開くと、朝日を浴びた緑の林が広がる何とも不思議な空間であった。

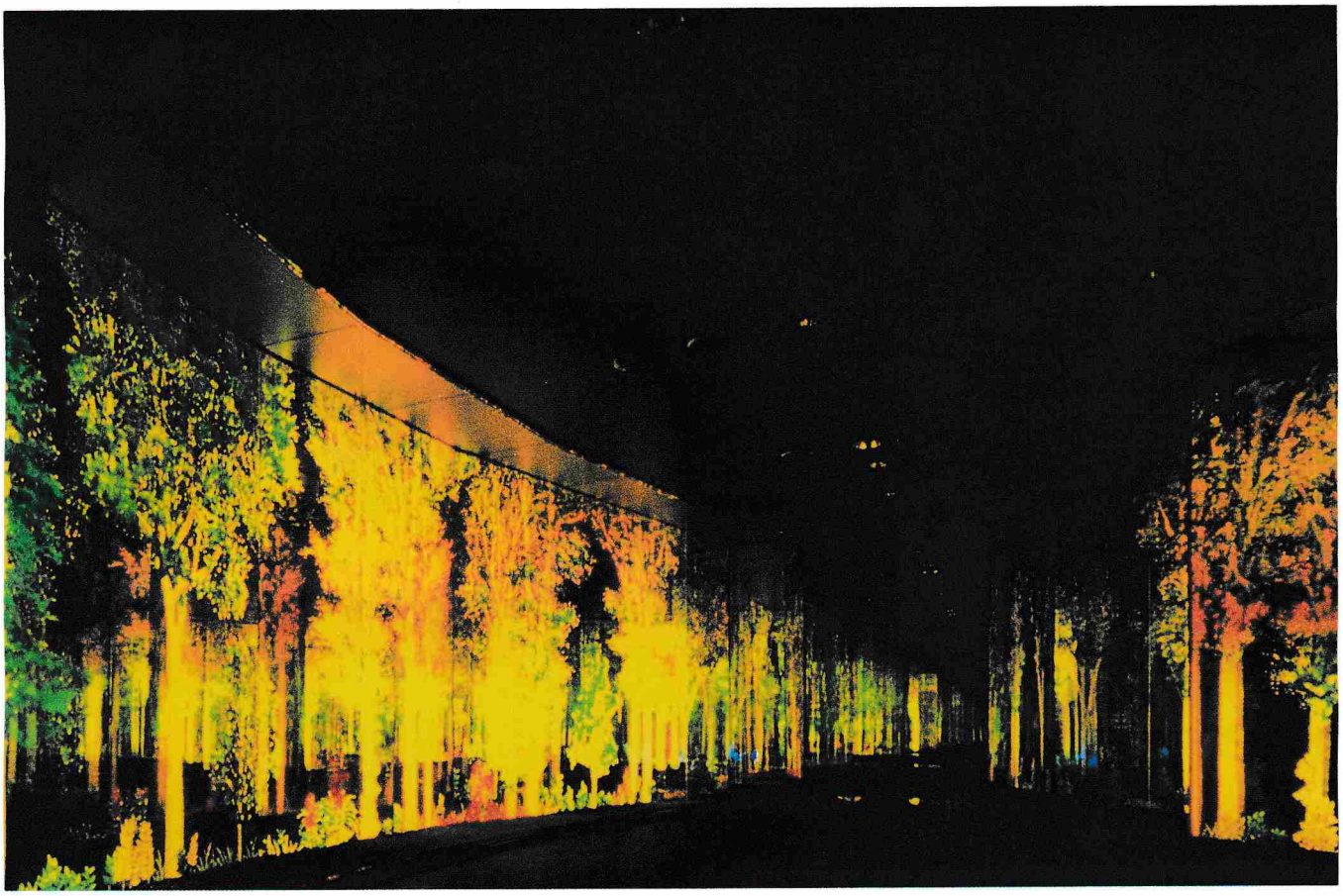
第一印象は、これは「だまし絵」の世界かと受け止めた。ヴィヴァルディの四季に合わせて、回りの林全体が朝日に輝き、そして陽が傾き、イナズマが閃く、夜の森に変わってゆく。15分と云う時間と、ヴィヴァルディの繰り返しは一寸単調の嫌いはあるが、この森林空間は人を引き付ける不思議な力を持っている。天井から床までの大版の板ガラスに樹木を彫刻し、プラスチックで色を重ね、数十本の蛍光燈や電球を、コンピューター制御で点滅させる光と音の演出、その上森林の臭いまで嗅がせてくれる。

板ガラスは、充分計算された角度に配列され、対面する鏡との間に入り込めば林が縦横に広がってゆく効果は実に見事に構成されている。欲をいえば、音楽もフィンランディア位いも加え、天井や床面にもっと自然な素材を使えばもっと臨場感が生まれたと思う。

兎に角、この作品は我々に色々と想像をする楽しみを与えてくれる、今までに無いタイプの魅力ある作品である。

環境造形と云えば、建築空間に鉄の部品を切った様な金属彫刻を配置する如き仕事に、我々はもう飽き飽きしているのではないだろうか、だからこそ、この森林浴体験室「森遊回廊」作品に審査員全員が新鮮な共感を覚え、協会賞に推すことに決定したのである。





森林浴体験室「森遊回廊」

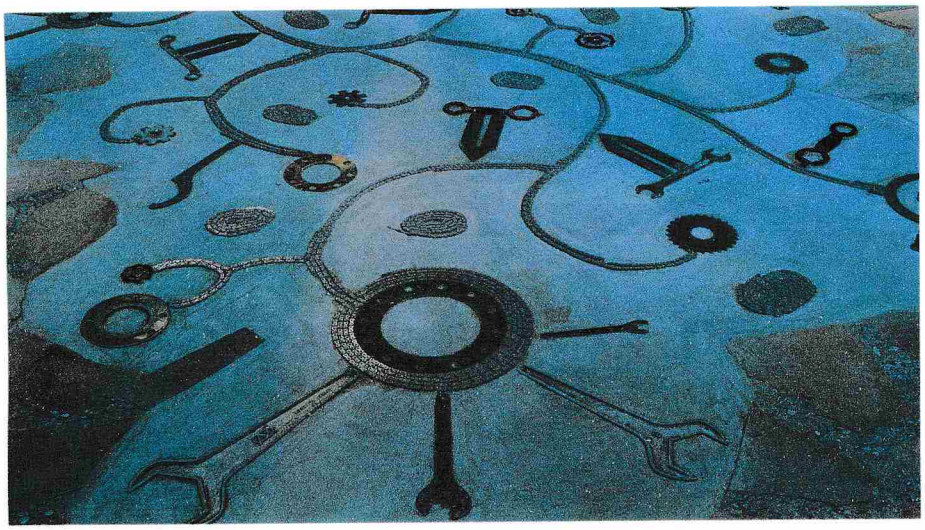
AACA特別賞審査講評：
榮久庵憲司
『生活工房・サッポロファクトリー』

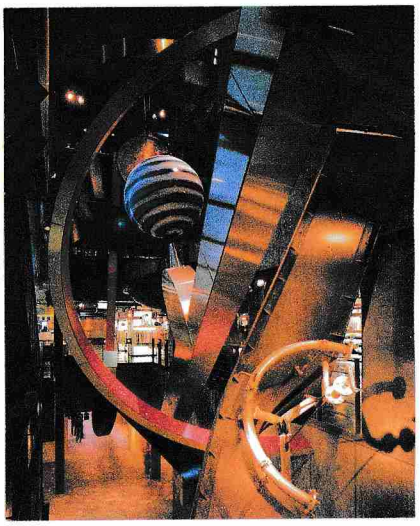
サッポロファクトリーは都市近郊の工場移転、路地利用、企業の文化化、メセナ運動、市民開放、事業採算のワンセットを率直に推進したまさに企業イメージの事業化の好例であろう。複合化された施設を参加体験することで精神の快適性が再生されればその事業は成功したといっていい。感性の満足ということだ。空間という風呂からの湯上がり感とでも言うべきか。

不特定多数の人々の不特定多数の感性を満足してもらおうと思えば、様々の作家の参加は一つの方法だと思う。快適な変化の連続が重要な事業目的だからだ。

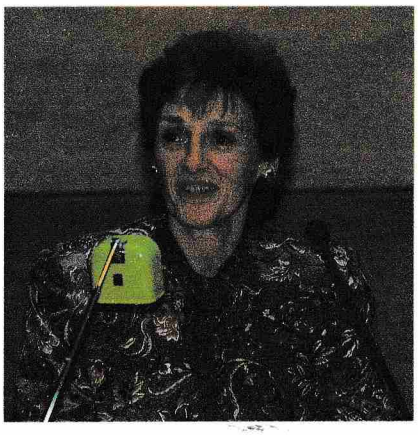
サッポロファクトリーは20数名の性格の異なった建築・工芸・デザイン・プランの作家達の参加が気持ちを合わせて創ったところに評価があり楽しませる。これぞaacaの主旨に沿った作家達の空間の創出でありエンターテイメントの事業化であろう。事業主にはそれなりに具体的なプランがあったとは思うが、理念を共有して各作家の個性を相互借景としながら創りあげたところに妙がある。ゆるやかな融合は職種の異なった多数の作家の共同作業の気分であり、その方法は今後の参考にするところ大である。

生活工房・サッポロファクトリー





aaca講演会「公共芸術と環境」



1994年10月28日　於 建築会館大ホール

司　　会：小 池　保
NHKアナウンサー
社団法人 日本建築美術工芸協会会員

開会挨拶：中 島 昌 信
社団法人 日本建築美術工芸協会理事

講　　演：ジョーン・モンデール（アメリカ駐日大使夫人）

ジョーン・モンデール夫人（Mrs. JOAN ADAMS MONDALE）

プロフィール

ミネソタ州・セントポールのマカレスター大学卒業。
専攻は歴史を学んだが、副次科目として美術とフランス語を研究。
卒業後ボストン美術館で学芸員としてスライド関係の仕事をする。
その後ミネアポリスの美術協会で教育者の助手として働く傍ら、見学者の案内や説明の業務を手伝う。
1955年、姉の紹介でウォルター・F・モンデールと出合う。同年12月にアダムス博士の仲介で結婚。
ウォルター・F・モンデールは1960年ミネソタ州法務長官、1964年上院議員となる。家族は、首都ワシントンに転居。
ワシントンでは、美術と政治に係る機会が多く、ナショナル美術館等見て廻った。
又、近隣の家庭を対象に消費者協同組合等を設立。ボランティア活動に参加、公立学校運営資金集め等に貢献した他女性だけの「ナショナルデモクラティッククラブ」「美術協会連合会議」等の委員として活動した。
1972年「美術における政治」を著書。
数年後、北ヴァージニアで著明な陶芸家の元で陶芸活動を志す。1976年彼女の夫はジミー・カーター大統領の許で副大統領に選ばれた。
1977年カーター大統領は、夫人を芸術・文化面で連邦会議・名誉会長に任命。
当時の彼女に付けられたニックネームに“芸術のジョーン”と云われる程国民的人気を博した。
４年にわたり芸術奨励のため国内を廻り推進活動を行った。芸術に対する奨励のためあらゆる援助の方策を強く政府に進言した。
1981年以来ジョーン・モンデールは一市民となり、芸術奨励のため推進者として講演活動を続けている。その他ケネディセンターの評議員として「パフォミングアーツ」「ウォーカーアートセンター」「ミネソタ交響楽団」「マカレスター大学」等芸術活動推進に係わった。

私にとってのアート

私たちの生活環境にアートがあること、アートと生活することがどんなに大切なことかを皆さんに話したい。

私の人生においてアート、芸術は大きな位置を占めてきた。父に連れられて幼いころ、美術館や博物館に行ったことは今でも最高の思い出として心に残っている。

夫、ウォルター・モンデールとの最初のデートも、ミネアポリス美術館での展覧会だった。そのころから夫は、私にとってアートがどれほど大切であるかを知っていたと思う。結婚してからも私は、アートに関する活動を続けてきたが、夫の理解なしには考えられなかった。

夫が副大統領になってからは、それまでの民間レベルの活動から、公の立場で芸術を擁護することとなった。その中でも、パブリックアートに関する活動は、私にとって最も楽しいものだった。

政府の姿勢

建物や公共の場飾るアートに反映される

政府の国民に対しての姿勢、態度は、建設する建物、それら公共の場所を飾るアートに反映される。

われわれが毎日、美術館や画廊に行くことができたり、美術品を所有することができるだろうか。大抵の人は無理だろう。しかし、パブリックアートがあれば、

それはすべての人にとって身近なものとなる。どんな場所にあれ、ありとあらゆる人が楽しむことができる。アートが全体の環境の一部となると、われわれを囲む風景に変化が起こり、より素晴らしいものとなる。

よいパブリックアートはサイトスペシフィック（その場所のためにつくられるもの）で、慎重に選ばれたアーティストにより作られる。アーティストは場所、周辺地域の歴史、目的、機能を考慮して作品を制作する。

行政とのパートナー

大胆な試みだった 全米芸術基金の設立

70年代の初め、連邦政府の建物の所有者である連邦総務局は、政府の建造物のための美術作品の委託製作を始めた。これが、パブリックアートの始まり。

その後、チュースマンハッタン銀行、IBM、フィリップモーリスなどの進歩的な企業が社会とビジネス両面でのアートの重要性を認識。これらの企業は、企業のイメージアップのために、また、従業員の士気高揚のため、そして地域に利益を還元する目的で現代美術の収集、作品制作委託を始めた。

1965年に全米芸術基金が設立されたとき、政府と芸術との新しい関係が始まった。これは、私たちにとって大胆な試みだった。このときから、政府は芸術への長期的な援助を行い始めた。

古代エジプトの職人がファラオ（王）の彫像の制作に取りかかったとき以来、アーティストは政府に援助を求めてきた。芸術基金は、個人の好みといった偏向的な選考基準ではなく、アーティストで成り立つ委員会によって選考、援助の可否を決める。この方法は、アーティスト自身がアーティストに審判を下すというもの。賛否両論はあるが、アートの今後の発展を考えた場合、多少のリスクなど覚悟する必要はある。

今日、パブリックアートは、私たちの国の隅々で見られる、ごく普通の、当然の現象になっている。何百もの州・市・町そして企業がプロジェクトの建設費の1－2％をアートに充てている。

行政と民間開発業者によるアートのためのパートナーシップの最も成功した例の1つに、マンハッタン南端部の金融街近くのバッテリー・パーク・シティ・プロジェクトがある。ハドソン川沿いのウオーターフロント一帯の公園の面積を広げて、商業、住宅地域として開発するために、バッテリー・パーク・シティ・オーソリティ（第3セクター）が設立された。

彼らは、ニューヨーク市の美術の専門家により構成されるコミッティによって運営される美術プログラムをつくり、開発業者との契約金による資金で、そのあたり一帯にたくさんの重要な現代美術の作品をコミットし、設置した。人がリラックスしたり考え事をしたりするように、いくつかの広場がつくられた。そこでは、心が鼓舞するような作品がお互いに調和しながら、門、いす、テーブル、橋といった機能を持っている。

建築とのかかわり

分野を越えた参加のプロセス欠かせない

アートは全体のプランの一部。このため、アーティストはプランナーやデザイナーとしてプロジェクトにかかわっている。アーティストは、照明、いす、標識、景観、ファサード、噴水といった機能を新しい視点でとらえ、パブリックスペースがもっと社交の場として機能するよう、その場が活性化できるような活動のアイデアを出してくれる。

これは、分野を越えた参加のプロセスがあって、初めて可能になるもの。建築家やエンジニア、都市計画家、地域の人々パブリックアートはプロジェクトの始まる前、期間中、終了後にわたり、さまざまな人々の相互作用を伴う。

なぜ必要か

新しい視野もたらし地域の環境を活性化

パブリックアートは私たちのコミュニティに必要なものかといわれれば、YES。その理由は大きく5つある。

①人々が身近に現代美術に接することができる。アートが私たちにとってなくてはならないのは、私たちの目を開き、新しい視野をもたらすから②都市開発に役立つ。公共の場にアートがあると、人を引きつけ、人が集まるようになる。その地域の特徴を取り入れることによってアートの作品はまた、地域の環境を活性化させる③アーティストを助ける。サイトスペシフィックなので倉庫から出した古い作品というわけにはいかない。コミッションによって、アーティストに、金銭的支援と都市計画および開発に直接かかわる機会を与える④パブリックアートで地域意識を養うことができる。制作のためのプロセスには、ふだん一緒に働くことのない政府機関、公共交通機関、建築家、アーティスト、コミュニティリーダーといった関係者間のコミュニケーションが欠かせず、協力関係を築くことを求められる⑤私たちの生活に喜びをもたらす。環境を一変させ、私たちを日常の世界から解放し、われわれの想像力をかき立て、心を踊らせ、そして、私たちの世を見る目に変化をもたらす。

日本庭園は最高のアート

日本には、昔から私が敬愛する日本庭園というパブリックアートがある。日本庭園は、景観アーティストと庭師と職人とアーティストでもあった僧侶が、大名や領主の依頼で協力した素晴らしい結果。庭には日本の人々に培われてきた伝統と日本の美学や哲学が込められている。

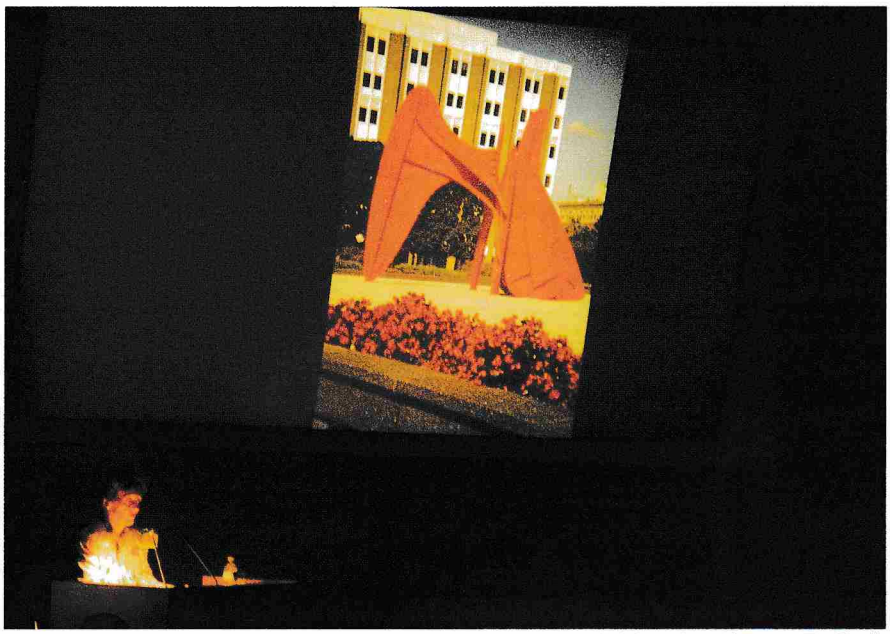
これらはまさに、その時代の最高レベルのアートを含んでおり、地元のみならず、日本の誇り、喜びとなっている。

私たちには、時代の先端をいく、ビジ

ョンを持ったアーティストによってのみ可能な、時代や文化や価値を体現するパブリックアートが必要。アートは私たちの時代の精神と文明の記録になる。

アメリカの作家、キャサリン・ポーターの次の言葉に耳を傾けてほしい。

「芸術は生き続ける……それは私たち政府、信条、社会はおろか、それらをつくりだした文明そのものがなくなっても残るもの」。



講演中のミセス・ジョーン・モンデール

aaca特別講演会に参加して

日本大学生産工学部
建築工学科教授
日髙　單也
AACA調査研究副委員長
千葉県習志野市泉町1-2-1
TEL.0474-74-2496

パブリック・アートのコンペ方式を思う

〈モンデール女史の講演から〉

パブリック・アートを擁護され続けておられるモンデール女史の講演は気品と自信に溢れ、パブリック・アートを多角的にとらえた格調高いものであった。パブリック・アートの位置づけについて、女史曰く、「パブリック・アートは単なる広場に置かれた彫刻や壁画ではない。芸術計画の特別の美は、芸術家がその初期からそこに居るということであり、委任された作品というのは後で思案したものでも、付加されたものでもなく、まさに正しい作品をと難しい追求をした結果なのである。芸術は全体計画の一部であり、芸術家はプロジェクト計画者・共同制作の設計者の中に含まれる。……」全く共感するところである。しかし日本の現状を思うと、果してどう対処すべきであろうかと、思案させられる。この場を借りて私なりの方式を提案してみたい。現在、我が国において公共建築等の企画・設計に当たっては、ほとんどがコンペ方式によって建築設計者が選定されている。しかし、総工費の1％を芸術的環境作りに向けようとする1％運動にもとずくアー

トに関してはどうであろう。空間設計の完了後あるいは工事半ばに至って、始めてアート計画が登場したり、ひいては工事終了時になって、取って付けたごとくにアート計画がなされる場面さえある。しかも、空間を演出する建築家サイドですら関知しないところでアート作家が選定されてみたり、あるいはオエライさんルートで強引に作品が設置されることもあるようだ。最近では設計を担当した建築家を交えて組織された“アート作家選定委員会（仮称）”のようなものが、その都度設けられ、作家の選定が行われ始めている。しかし、モンデール女史も提案するところの、“より良い芸術的環境作りに向けて”、芸術家の積極参加、つまり、プロジェクトの初期段階から設計者と芸術家とが共同作業するという場面には、残念ながら至っていないのが大多数である。

そこで、芸術家の積極的参加を可能にするシステムとして次のような方式はいかがなものだろう。

公共建築等の設計コンペにおいて、コンペ参加条件に最初からパブリック・アート担当者（芸術家、ランドスケープデザイナー、コーディネイターなど）を登録する方式である。すなわち、建築設計者とパブリック・アート担当者がセットになってコンペに参加することを義務づけると言う方式である。

この方式の是非は諸々あろうが、少なくとも芸術的環境作りを意識したプロセスを踏むことが可能となり、新しい提案や冒険を可能にするシステムとして有効な方式ではないだろうか。

関係諸兄・諸姉のご意見を賜りながら、更なる検討を進めていきたいと願っている。

㈱インプレス代表取締役
稲葉　亘快
AACA会員
中央区日本橋茅場町2-13-8
TEL.03-3668-5977

特別講演会「公共芸術と環境」に寄せて

このたびミセス・J・モンデールの講演会に参加し、そこで話されたことがパブリックアートに対してたいへん有意義な意見であり、将来への方向を示唆する内容であったので、都市環境デザインに強く関心をもっている一人としておおきな悦びを感じた。

1960年代アメリカの小さな街から始まった公共空間のアート設置運動。それはその都市固有の環境、歴史、機能etc.を考えながら作品の制作設置をすすめている。

その発想は、幼児から良い美術教育で成長したボランティア学芸員達によって推進されてきたのだと語られた。

都市デザインの重要な要素になっているパブリックアートが、日本では広場や建築物の前庭に…と調和なしに既製のオブジェや彫刻作品を置き、それだけで文化都市の表情がつくり出されている現状はじつに情けない。

ミセス・モンデールの故国での都市環境デザインのテーマの求め方は、街の歴史調査からはじまり、第一にその街の誇りを表現すること、第二に創る物はランドマークとなるコンセプトでデザインすることである。それに加えていちばん大事なのは建築設計のスタートから、アーチストも参加してプロデュースしていくのである。設計家と創作家の相互作業と理解が必要である。アーチストは自分の既製作品ではなく、あくまでもその場所のための新しい作品をつくるのだ。

日本でも今後は、建築設計家とアーチストとの交流作業が必要であると、先日見たS市の庁舎の例からも特につよく共感した。

わが国では、企業の認識によってメセナ活動が活発になってきた。これに平行してパブリックアートの重要性も脚光をあびてきている。都市計画参加の機会を芸術家が得られるとは素晴らしいことだ、私の体温も高まる。

ヨーロッパでも都市の誕生には、広場・教会・井戸・日時計などと町の顔であるパブリックアートを創りだす職人達が腕を振るった。それら美しき町には、幾世紀にもわたって恋があり生活があり、そこを訪れた旅人の心のなかに残る風景を今でも提供し続けている。

幼きころ、母とともにすごした町の景色、想い出の場所は人間にとってとても重要な意味があるとおもう。パブリックアートの責任の重大性がこのことからもわかる。

今回の講義のなかから印象深い言葉を書き出してみると「パブリックアートは①コンテンポラリーであること。②地域環境を取り込んでいること。③場を変身させること。④地域意識を高めること。⑤人々に悦びをもたらすこと」であった。

関係者の調和ある共同制作を願うとともに現時点で点在し放置されている作品は、てきせつな保守管理によって美しい容姿をたもち、いつまでも我々に魂の囁きと語らいを発信し続けてほしいと祈る。

あらゆる意味でAACA会員は、21世紀にむけての使命を負っているのである。

㈱エノモトアトリエ代表取締役
榎本　建規
AACA会員
新宿区市ヶ谷仲之町3-14
TEL.03-3351-6704

今回私はモンデール夫人による「パブリック・アート」の講演に深い感銘を受け、同時にパブリック・アートに対する夫人の偉大な情熱にうたれました。私にとってパブリック・アートと云う言葉はまだ耳新しい。それは人々のアートであり、その原点であるアメリカ民主主義のこころとして成功していることを知らされました。街の、そして公共的な場のすみずみ迄活性化させる実行とその実例を示されよく理解できたと思います。パブリック・アートはその言葉以前すでにさまざまなカタチで永い歴史と文化にエポックされている。かつてのギリシャやローマを問わずルネッサンスの人間の崇高ないとなみとしてアートが脈々と創られ伝えられて来た事を思い、又日本のそれも平安、室町、鎌倉そして江戸のそれぞれの文化の中にそのエネルギーを見る事が出来る。しかし今日、産業経済中心の時代となって人々の心の糧は片すみに追いやられた。ここでどうしてもアートの復活による人々の精神的解放と高揚を新しいアートの在り方に求める事が必然とされる。まず立って遠くを見る事。今までのカタチの向こう側にあるものは何であろう。それは個人的な存在を越えるもの。そしてもっと楽しい「対話」が見えて来るはずである。私はこの講演で語られた言葉―「パブリック・アートはそのプロジェクトが完了する以前―実行中―以後にわたり人々の間の相互作用を含んでいる」ことが重要なことだと思った。それはパブリック・アートが発信する波又は作用である。思い浮かぶのはバウハウスの運動が与えた数々の影響である。絵画、彫刻、デザイン、建築を含むあらゆる芸術分野における対話が始まった事と世界的視野で交流を拡げ始めた事、そして戦争やもろもろの困難な道のりを経てアートの社会性に対する実験が始められた。ある時私も参加した思い出があるが、1970年の大阪万博に先立つ1966年秋「空間から環境へ」展がひらかれた。主催者である「エンバイラメントの会」の委員の一人は語っている。「この展覧会が絵画、彫刻、デザイン、写真、建築、音楽といった各分野のメンバーの参加によって開かれて事はおそらく世界では始めての事だと思われる……多くの芸術分野が共通の問題をかかえている……ここで発見された矛盾について意見を闘わせる事こそ次の仕事である。」そこでこの「環境」と云う言葉こそアートがめざすべき場であると云う議論が開始された。独断ではあるがこの時日本のパブリック・アートへの概念が芽吹き模索が始まったと思われる。今回私なりにうかがい知ったのはパブリック・アートはジャンルとしてでなく心の交流であり、アートと公共の場との安易な迎合ではないと受けとめている。講義の中で、ミネアポリスのイレーネヒクソンホワイトニー橋の実現とその現在の色々なエピソードに感動致しました。

㈱土屋厳建築設計事務所 社長
土屋　厳
AACA総務運営委員
新宿区大久保2-19-4 いせ市ビル
TEL.03-3200-3671

「我々はパブリックアートが単独では起こらないことを認識している。それは忍耐と計画と理解を必要とする。“恩恵は努力する価値のあるものである”という私の意見に同調してくれることを希望します」という結論で締めくくられたモンデール夫人の講演は、同時に上映されたビデオの美しい映像とともに、会場の人々に深い感銘を与えました。

社会にあって芸術が果たさなければならない役割とその重要性は、一般論として理解はされているものの、夫人の言われるパブリックアート本来のあり方としては、残念ながら日本の市民のあいだでは今だに社会的な認知をえていないのが現状です。

「日本は古来より日本庭園という文化遺産、立派なパブリックアートをもっていたのです」といわれる夫人の指摘はまことに納得のいくものです。

振り返ってみると私たちにとって日本庭園は、常日頃あまりにも身近にあったせいか、今日では類型化してしまい、単に自然のミニチュア版とうけとられがち

でした。夫人の示唆に私はある彫刻に思いあたりました。それは遠山美術館の庭におかれた流政之作の「こいし」と名づけられた石彫のベンチです。さして大きくはないその現代彫刻は、古い静かな日本庭園に組込まれており、まるで過去と現在を継ぎとめているかのような不思議な存在感をただよわせており、秋のこぼれびの落葉の下で息ずいているように見えたのを思いだしたからです。

今日我国のパブリックアートの例を見ると、夫人のいわれるような都市や広場の全体計画の一部として、最初から芸術家が参加する機会はまだ少ないようです。企画側にぜひ留意してほしいと思います。

夫人はパブリックアートの起源とその後の発展について述べられ、又なぜパブリックアートが我々の社会にとって重要なのか、について四つの項目をあげて説明され、数多くの事例を披露されました。又才能豊かな作品が街におかれたときに、さまざまな称賛と誹謗が渦巻くことになったとしても恐れてはならない、と励ましています。このような自らの体験をとおしての貴重なアドバイスはまことに傾聴に価するものです。

我々は、現代に生きる芸術家として、社会に向けて、作品をとおして、都市環境に対する人間らしい何かを発信しなければならないと思うのです。

今後も、aacaの各分野の優れた芸術家たちの協力で、是非とも真のパブリックアートを具体化していきたいものです。

このたびのモンデール夫人の講演会にあたって、今日の日本の社会が、急激な経済発展の過程で置きざりにしてきた心の量への反省が、講演会場の人々の間に、ひしひしと伝わってきたと感じたのは私だけではなかったと思うのです。

㈱トーヨコ理研
技術管理本部部長
三木　経一郎
ACCA事業委員
千代田区三番町8-7 第25興和ビル
TEL.03-3221-3320

昨秋、モンデール米国大使夫人の「公共芸術と環境」について大変格調の高い、有意義な講演を拝聴し、夫人の実践力とその情熱に大変感銘いたしました。ACCA会員であり建築業務に携わる一人として、その責任と役割の重さを新たに痛切に感じた次第です。日本の社会に公共芸術が定着するより一層の努力をしたいとの思いを深く致しました。

世界各国、それぞれ人権、言語、文化が異なりますが、素晴らしい芸術に触れた時の感動は国境を越えたものです。公共芸術は人々に、いつでも、誰でも平等に接することができ、多くの人々の人格形成に影響を与え、その感性を磨く役目を果たします。又おはなしにもありましたようにその作品は、都市づくりに参画した全員の共同制作であり、全ての人の協力、努力、理解の結晶なのです。

日本の社会は従来その生活習慣から、共有財産としての公共空間という意識に乏しく、芸術作品は主として美術館、神社仏閣、個人又は企業の所蔵といった特定の場所に限られた存在であった。

美しい自然の中で人々が暮らしていた頃は、自然から全てを学び、その感性を磨いていたが、今日人々は、政治、経済、教育等といった理由から人工環境の都市に集中して住むことを余儀なくされている。近年、都市づくりの手法として特定街区、総合設計、市街地再開発等の開発が取り上げられ、官民一体となった街づくりが行われるようになり、ようやく環境整備による公共空間が理解されるようになったことは大変喜ばしいことです。人々の共有財産としての公共芸術は、自然の回復と共に公共空間の環境整備に果たす役割は大きいものと期待されます。

公共芸術は唯、芸術作品を空間に置くことではなく、本来そこにあるべき存在なのです。お話にもありましたように都市施設そのものが公共芸術であるべきなのです。公共芸術はその町に生まれ育った人の心に宿り、長く思い出として残るべきものなのです。一昨年の香川、徳島研修旅行で庵治のイサム野口先生のアトリエを訪問した時の感激を思い出します。

1月末に阪神大震災の神戸へ出かけました。堅牢で倒壊するはずがないと思っていた建物が、自然の一撃でいとも簡単に破壊され、一面の瓦礫と塵芥の山。自然の力の恐ろしさに呆然として神戸の町を歩き廻り、疲れはてて夜のメリケンパークに辿り着いた時、フランク・O・ゲーリーのフィッシュダンスの元気な姿に出会った時、実に何ともいえぬ、ほっとした気持ちになりました。神戸の町は新しい町づくりのもと、復興へのスタートをすることと思いますが、安全な町づくりと共に人間性回復を目指した神戸市民が後の世の人に誇れる豊かな感性の町づくりに取り込んでいただくことを念願致します。

Mrs.ジョーン・モンデールありがとうございました。

又この度の講演にご協力いただいた、現代彫刻センターの飯野社長及び事務局の皆様に事業委員として厚くお礼申し上げます。

時代の華一輪

版画家
MASAAKI TANAKA
田中　正秋
AACA会員
㈲世田谷美術センター　代表取締役
東京都世田谷区桜新町1-12-2
TEL.03-3420-7484

祭りを題材とした版画を制作してから、もう25年になる。祭り自体の意義とか起源とかは別にして、その存在は各々の地域の環境と人に密接に結びついている。

今迄見て来て印象に強く残るいくつかの祭りがあるが、その一つに長野県野沢温泉村で１月15日に行われる道祖神祭りがある。ブナの柱、これは20メートル程の高さで５本、これに神輿よろしく桁を渡し藁縄でしばり櫓を組んでいく。高さは10メートル程になりその上部は約50平方メートル、外観は外ころびの神殿を造る。祭りの最後には火をかけ燃やしてしまうのであるが、木製の道祖神人形も重要な役割をもって、福岡のうそかえ神事のような存在。祭りに参加する中心は厄年の男ども。長い間見よう見まね。口伝えで伝えられてきた祭りである。

海人文化の移入があちこちに見受けられる興味深い村の祭り。縦と横の人と人との関わり、これが祭りに最も大切な要素で、これは祭りが新しいか古いか、規模とか期間とかは殆んど関係ない。道祖神祭りは版画に制作し、週刊誌の表紙や村役場の壁画（３×６メートル）。ポスター、などに使用され、今迄1000点を越える版画作品の中で、最も多くの人々の目にアピールした作品の一つになっている。

野沢温泉村は人口5000人程、スキーと温泉で知られているが、初めて取材で訪れてから10年近くなり、何かの機会を見つけては出掛けているが、県外人として感じた様々なこと、食べ物とか周囲の環境（花や木を植えたらとか、郷土資料館的な建物が欲しいとか、ホップを昔のように植えてビールをとか）など結構言いたい放題、村長はじめ村の人々に話している。祭りを見に日本各地を回って、地方自治体が面している諸問題を、祭りを媒体として感じる部分がそこに見受けられ、ついああしたら、もっとこうしたら、と思うのである。

野沢の道祖神祭（長野県）

時代の華一輪

YUKIO KIMURA
木村　幸夫
AACA会員
武蔵野市境南町3-14-16
TEL.0422-32-7850
FAX.0422-31-2370

夕陽のファンタジー

幾度か訪れる都庁“ふれあい広場”であり、同じ場所ではあるが、その都度この「水の神殿」の水と光（太陽光）の交錯、そしてそれから発せられる視覚現象（sign）は違って見える。

幾度か撮った写真の中で、この一枚は私に“深い感動と幻想”を与えてくれた。

それは太陽光と…この噴水との強烈なインパクトであり、幾条かの噴水と太陽との微妙な光の時間差角度により、演出される素晴らしいスペクタクルである。

地球から太陽までの距離は、約１億５千万kmといわれ46億年前よりこの地球を照らすという、想像に絶する壮大なドラマを感じる。

時々刻々変化してゆく光の状態の一瞬に“地球・水・太陽とのふれあい”…“人と人とのふれあい”…“人々と地球とのふれあい”そして“地球と宇宙とのふれあい”という大きなファンタジーを感じる。

そんな思いに耽ける何分かの時に太陽は、西方のビルに没してしまった。

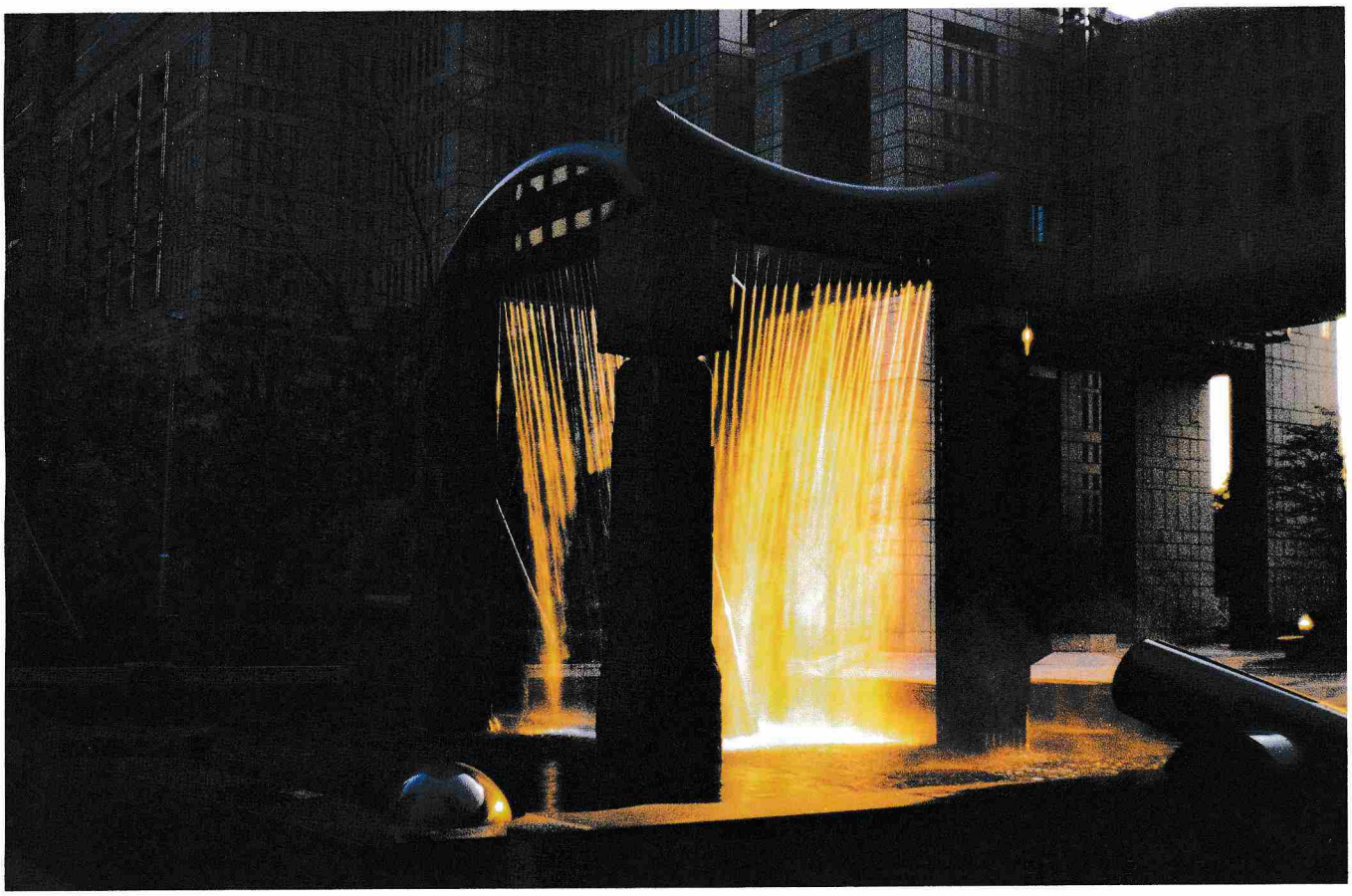
あとは静かな黄昏であり、そこには聳え建つ都庁のゴシック建築があり、周辺には高層ビルがいつもの表情で屹立してる…ようやく現実に戻ったよう。

先の大戦により荒廃した東京…そしてこのように世界に誇れる都市環境、産業経済の振興それらに果たしたデザイナーの英知と活動を今更のように覚える。

私は戦時学徒出陣、九死に一生を得て生還した一人であり、一貫してデザイン関係に従事、現在は美術デザイン専門学校で講師として、主として基礎デザイン・サインデザインを担当しているが、丁度この日は実地教育で新都心における、公共・複合サインデザイン考察で学生を連れての行動であった。都庁243Mの展望室よりの広い視覚からの景観、そして地上周辺におけるアート作品を鑑賞し、案内・誘導サインの研究のあと…この“ふれあい広場”に至った。

私はデザインの原点は“心のメッセージ”であると常々学生に言っているが、このことを現実に学生たちは感じてくれたことと信じている。21世紀までに2100余日…若い人々に今、託すことは多い。

末筆ですが「水の神殿」を製作された、関根伸夫氏に心より敬意を表します。



アピアランス 会員作品紹介

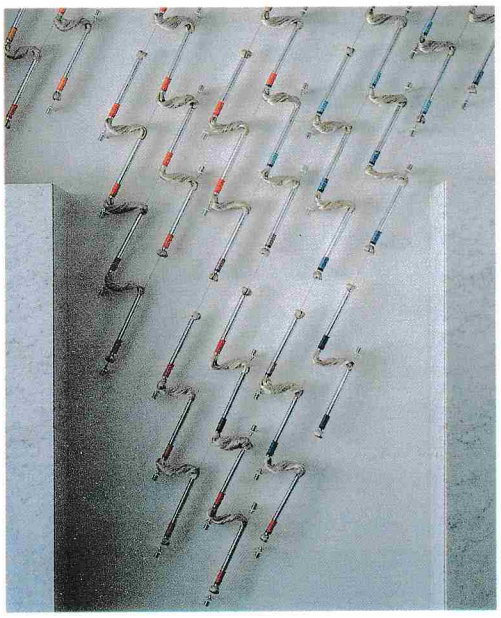
タペストリー作家
MUTSUKO SUNAHATA
砂畠睦子
横浜市神奈川区浦島町5-16-707
TEL.045-451-5973

メタリック調のこのタペストリーはワイヤーネットをベースに糸で刺しました。静かにきらめきスパイラルな響きを奏でるイメージです。劇場ホールへの期待感に満ちたホワイエでの導入効果を意図しました。

「響　き」
設置場所：
小平市民文化会館
大ホールロビー
9000H×3000W(mm)

ファイバーアーティスト
CHIHAYA NAKAGAWA
中川千早
東京都世田谷区粕谷3-24-23
TEL.03-3307-7392

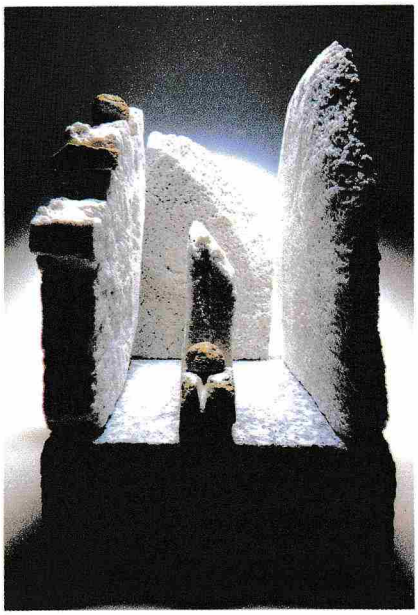
雨上りに差し込む太陽の透明できらきらする光をテーマにしました。絹糸の光沢、金属の輝きを明るい色調で強調しました。



「光の調べ」
設置場所：
ティアラこうとう

梶谷　胖

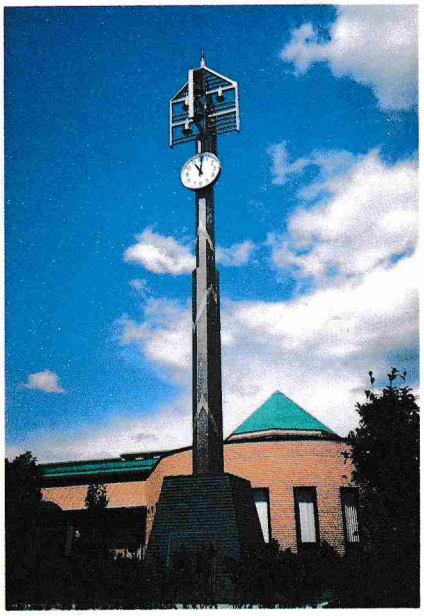
石、焼成した天然石、花崗岩、長硅石等の組み合わせ。
「やきもの」の釉薬原料を焼成して固め板状のものから新しい形体を切り出して、再構築をして、また焼成する場合もある。



「アーキテクトニック・
シークエンス・ワン」
設置場所：
個人蔵（東京）
260×190×160(mm)

株式会社 環境美術 代表
RYOHEI SATO
佐藤良平
東京都練馬区桜台5-25-9
TEL.03-3992-3707

上里町の学びの館に隣接する公園に建つモニュメントである。定時に音楽を奏でるカリヨンと時計と避雷針を一体化してデザインし、柱をアルキャストで覆った。田園風景の中にあって地域のメルクマールとなっている。



「カリヨン塔」
設置場所：
埼玉県上里町
11450H(mm)

※会員の皆様の作品ご紹介ページです。皆様ふるってご参加下さい。

第64回　1994年10月21日　　於 TOTO銀座パビリオニ9F・会議室

ゲスト　アーティスト

MOEGI ITO
伊　藤　萌　木　氏
AACA会員
茨城県北相馬郡根町羽根野台800-60
TEL.0297-68-8603
FAX.0297-68-8604

今までを振りかえってみると、初対面の人には自分の仕事つまり鍛金の説明に明け暮れてきたようです。そこでここでも「鍛金について」「現在の私がどうしてあるのか」を作品を通して話そうとおもいます。

金工の技術は形作り・成形の技法として大別して鋳金と鍛金の2方法に分けられます。そして表面の加飾技法として彫金が発達してきました。

鍛金とは純金属の持つ延展性を利用して加工する技法で塊材成形の鍛造と板材成形の鍛金絞りに大別されます。歴史的には金属加工技術は砂金等の天然のわずかな自然金属（金・銀・銅）を鍛金加工することから始まったとされ、自然金が枯渇すると鍛金技術によって生産された合金による鋳造技術が発達しました。冶金精錬技術が発達して金属の純度があげられるようになってから鍛金が一般化するようになり、日常の道具類が作られるようになりました。近代にはいり工業化が進み鍛金技術は（手加工による絞り）は衰退し、現在は美術工芸作家としてわずかに残っているにすぎない状態にあります。自動車、タンカー、鍋、やかん等の身の回りの金属量産品は工業化された鍛金製品がほとんどです。

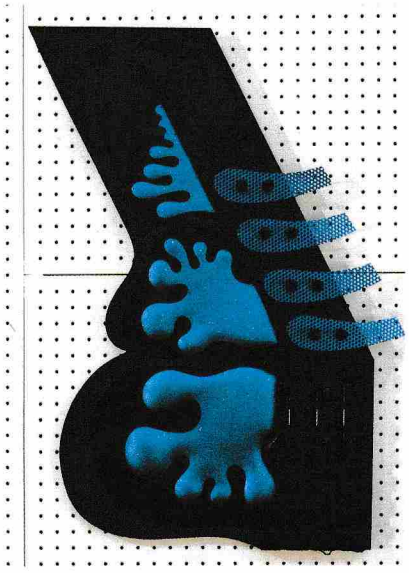
鍛金は焼鈍した純金属を金槌で少しづつ形成する、焼鈍しては成形を繰り返すことにより目的の形に近づけていきます。例えば径400mm・深さ500mmの桶状の立体を打ち出すためには直径950mmの円盤をおよそ5万回も打ち絞り延ばします、この間に30回ほど焼鈍します。この気の遠くなるような作業は作っている本人にいろいろと考えさせます。

なぜ鍛金にこだわるのか？
それは他の技法では得がたい魅力を持っているからである。

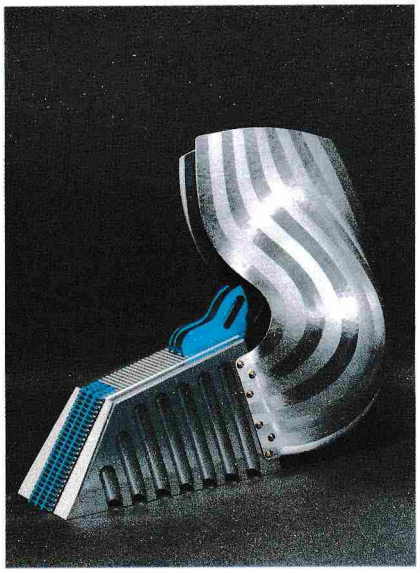
鍛金の魅力とは作品の形状、表面の凸凹、きず、肌合のすべてが作者と地金のかけあい、やりとり上で形成されたものでありすべてが作者の責任のもとになること。初期の頃の作品は金槌で丸くすべてを一枚でたたき出すような作品が多く、自分の手の汗が染み着いた他人では出来ないクセのある形状を打ち出しては満足していたようでした。しかし体力、時間等で年間2～3点しか制作出来ないので、鍛金の魅力を損なわずに省力、省時間で制作する事をしだいに考えるようになりました。ひとつは従来の銅、鉄以外の材料としてアルミニュウム、ステンレスの使用でした。また次の手段として工業技術の導入で材料切断機械、成形機械、そして近年の数値制御工作機械の利用を考え、これにより省力、省時間そしてより沢山の人間臭を金属へ封じ込めることを試みるようになりました。また少数しか制作できないのならモニュメンタルなものを作るべきだとも考えました。

伝統的な床の間用の「三足の香炉」制作技術の修得から始まってCNC工作機のプログラミングまで鍛金畑を耕して来ましたが建築空間用の作品としてそろそろ実りがありそうな気がしている今日です。

東京神田OK司ビル前 彫刻モニュメント



ウミタケとその友人達



衡風

'95新潟シンポジュウム

日時：平成7年6月9日㈮
　　午後1時～5時
場所：新潟県新潟市
主催：社団法人 日本建築美術工芸協会
主催：新潟県・新潟市
挨拶：(社)日本建築美術工芸協会会長
　　芦原義信
　　新潟県知事　平山征夫
　　新潟市長　長谷川義明
記念講演：文化庁長官　遠山敦子
パネルディスカション
テーマ：「海と景観」――日本海都市の未来像――（仮題）
パネラー：(順不動、敬称略)
　　樋口忠彦(新潟大学教授)
　　長谷川逸子(長谷川逸子建築計画工房㈱代表)
　　池田武邦(㈱日本設計池田研究室代表)
　　豊口　協(長岡造形大学学長)
司会：内井昭蔵(京都大学教授
　　(社)日本建築美術工芸協会副会長)

海と景観
――日本海都市の未来像――

海国日本といわれながら、我が国の都市において海と関係はあまりフレンドリーではなかったように思われます。しかし、日本人の心の中には常に海が存在し、はるか海原の彼方に未知の国、浄土楽園を夢見続けてきたといってよいでしょう。

ひと頃、ウォーターフロントに皆の目が集中し、にわかに海と都市との関係を見直す気運が生まれました。これはあまりに経済優先の思想がもたらした無秩序な埋め立て、それに工場群や発電所など産業的建造物による海の景観をいためつくした結果の反省でもあったと思われます。ほとんど都市周辺の海岸線は人工で書きかえられてしまいましたが、日本海側ではまだ豊かな自然に恵まれた都市の海を見ることができます。来世紀は日本海時代といわれますが、来るべき時代にふさわしい景観をどのように形成し、守っていくかを考えることは有意義なことと思われます。

「海と景観」という巾広いテーマを選びましたが、多くの人々から多様な課題を提供していただき、論議を進めたいと考えたからであります。皆様の積極的なご参加を得て、有意義なシンポジウムとしたいと存じます。

平成7年度(1995)通常総会予定

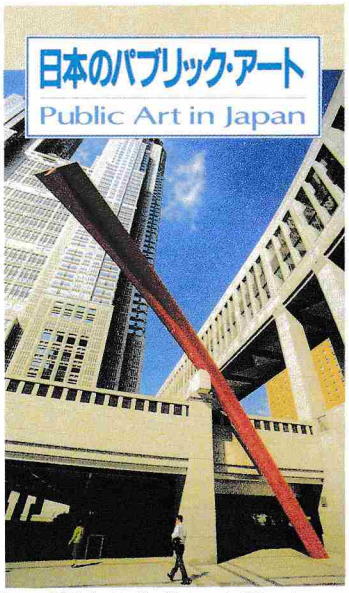
日時：平成7年4月26日㈬
　　午後5時30分より
場所：建築会館ホール
　　(東京都港区5丁目26番20号建築会館1階ホール)
◎議事次第：定員数の確認
　○開会：会長挨拶　議長(会長)着席
○議事：議事録署名人の選任
　○第1号議案　平成6年度事業報告及び収支決算に関する件。
　○第2号議案　財産目録及び貸借対照表に関する件。
　○第3号議案　平成7年度事業計画及び収支予算に関する件。
　○第4号議案　役員の選任に関する件。
　○その他議案。

第6回協会設立記念会盛会に終了

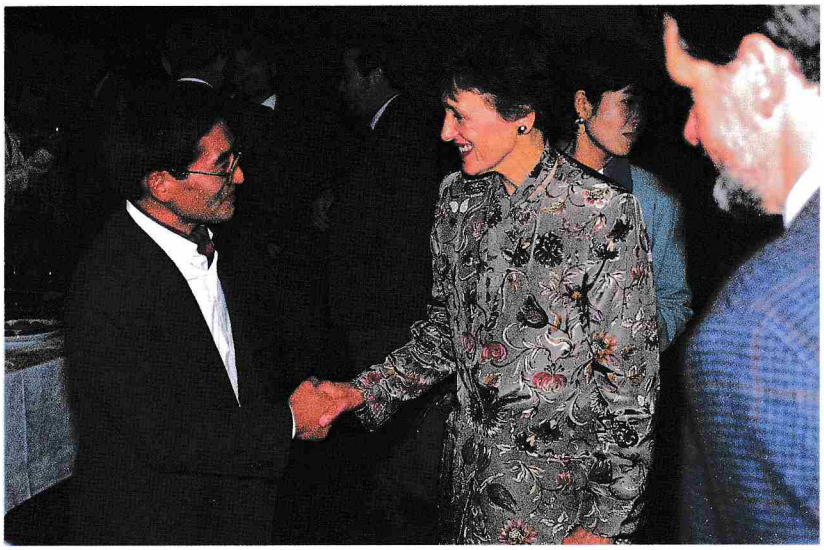
法人設立第6回目の記念会を日本建築学会ホールで開催いたしました。170人の会員参加と文化庁他27名の来賓の出席があり協会6年の節目として芦原会長の挨拶に続き古畠会員増強委員長の会勢報告と文化庁福島部長の来賓挨拶、次いで協会賞表彰式と進み懇親交流会では、歌手の竹山京李さんのアトラクション等があり盛会裡に協会設立記念会を終了いたしました。

当協会会員による新刊を2点紹介します。

書名　「新しい美術館学」
　　――エコ・ミューゼの実際――
著者　長谷川栄
体裁　四六判上製・366ページ
定価　3,800円／三交社



書名　「日本のパブリックアート」
著者　竹田直樹
体裁　A4判変型上製・194ページ
定価　9,800円／誠文堂新光社



モンデール夫人講演会終了後の懇親パーティー風景

発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108 東京都港区芝5-26-20
建築会館6F
振替：東京 1-365085
編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会
広報担当理事 柳澤孝彦
玉見 満（委員長）、大多了介、北村孝昭
坂上みつ子、崎山小夜子、高部多恵子
冨田俊男、石田眞人
制作協力：㈱SP建材エージェンシー

素材は文化を変える

CERAMIC ARTS

川崎市第３庁舎エントランスホール陶壁画

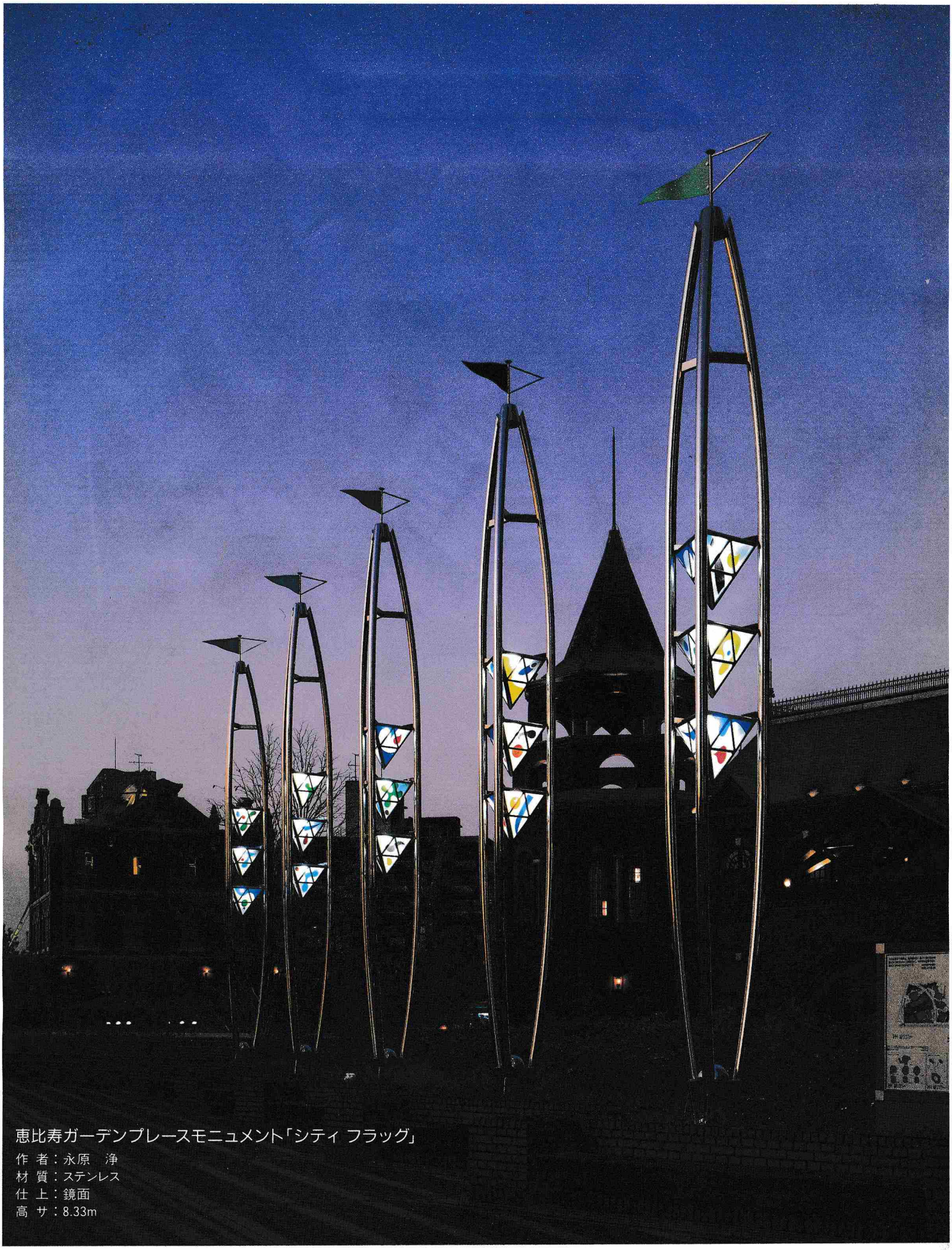
「ロボット誕生」(H11,500×W9,200)
猪能弦一郎 作

施　主：川崎市
設計者：㈱神谷・荘司計画事務所
施工者：第３庁舎建設共同企業体 ㈱間組J・V

大塚オーミ陶業株式会社

東京/〒101 東京都千代田区神田司町2-6 TEL.03(5295)3555
大阪/〒540 大阪市中央区大手通3-2-21 TEL.06(943)6695

【営業品目】●美術陶板●建築陶板●テラコッタ●写真陶板
●サイン、デザイン陶板●肖像陶板



恵比寿ガーデンプレースモニュメント「シティ フラッグ」

作 者：永原　浄
材 質：ステンレス
仕 上：鏡面
高 サ：8.33m

METAL ARCHITECT
KIKUKAWA

菊川工業株式会社　本社　〒130 東京都墨田区菊川2-18-10 TEL03-3634-3231(代表)